

咲がそらの
いのち

日蓮大聖人の教えを正しく伝える法華宗



法華七喻 その四 「髻中明珠の喩え」

法華經の安樂行品に説かれる「髻中明珠の喩え」を紹介いたします。

この世界を治めている王さまがいました。ある時、その王さまが兵をあつめて敵を討伐しました。その労に報いるため、王さまは褒美を兵たちに与えます。金銀財宝をいただいたものもいれば、中には町を丸ごといただいたものもいました。しかし、その段階で王さまが兵たちに与えなかったものが一つあったのです。それは、王が頭の上で髪を束ねていた、その中に収めていた宝珠でした。この、頭の上で束ねた髪のことを髻というため、このたとえは「髻中明珠の喩え」といいます。

この王さまは仏さまのことをたとえています。仏さまが世の中を治める力とは、智慧の力です。敵と戦う兵とは仏さまを信じて集う私たちのことです。敵とは煩惱のことで魔物にたとえられます。仏さまは煩惱という敵をはらうために様々な教えを説いて人々を導いたのです。しかし、はじめから法華経という教えを説くことはありませんでした。

しかし、魔物と戦い大きな手柄を挙げた兵たちをみて、王さまは歓び、髪の中に収めていた宝珠をついに取り出し与えるのです。この最後まで隠されていた宝珠こそが、私たちが日々お唱えしている法華経なのです。

土地や、金銀財宝といったもの（法華経以前の教え）は決して無価値なものではありません。しかし、この世にたったひとつしか無い髻中明珠（法華経）に比べればかすんでしまいます。また、法華経が説かれる前に説かれていた教えを信じていた人々も、法華経に出会うことで救われるのです。

この世界を生きる私たちは、信じる心を持ち、日々の修行をすることで仏さまから宝珠を手渡していただけるのです。この修行とは心を清らかにして、お題目を唱え・聞かせるという菩薩行のことです。

さて、令和となって初めての春のお彼岸を迎え、一年の四分の一が過ぎようとしています。お正月や節分にこの一年の願いをお祈りされた方も多いのではないのでしょうか。このたとえにあるように私たちの周りには「魔物」がうごめいています。そういった誘惑に負けないよう、心を落ち着かせ、お題目を唱え、一日一日を過ごして参りましょう。

※法華宗のホームページでは法華七喻を漫画でわかりやすく紹介しています。この機会にぜひご覧ください。

<http://hokkeshu.or.jp/sp/manga.html>

